

〈翻 訳〉

ラートブルッフ：
権威刑法か社会的刑法か？ 1933

Gustav Radbruch,
Autoritares oder soziales Strafrecht? 1933.

鈴木 敬 夫 訳

Übersetzer: Keifu SUZUKI

この拙訳を、ホセ・ヨンパルト（José Llompart）博士に捧げる

目 次

1. 訳者まえがき

権威刑法か社会的刑法か？（Radbruch, Autoritares oder soziales Strafrecht?
1933）

2. 訳者まえがき

ペーター・ギュンター，愚か者にして英雄（Radbruch, Peter Günter—Narr
und Held1, 1938）

1. 権威刑法か社会的刑法か？ 訳者まえがき

第二次大戦当時、欧州ではナチズム（国家社会主義）が台頭し、ユダヤ民族に対する大量虐殺へと突き進んだ史実はわすれることができない。いうまでもなく、ナチズムはゲルマン民族の優秀性を鼓舞する民族主義であり、個人より国家を重視する超個人主義であった。それは必然的に“法律は法律だ”とする「法実証主義」を掲げ、現実には存在する法、すなわち制定法や判例だけが法であるとする法律観を育んだ。法実証主義の立場によれば、いかに非道徳的で邪悪な内容を含んでいようとも、一定の妥当な手続きを踏んで制定されたものでさえあれば、それが法であるとみなされる。ラートブルッフの代表的なナチ法批判論文「制定法

の形をした不法と制定法を超える法」(Gesetzliches Unrecht und übergesetzliches Rechts, 1946) のなかで、「まことに実証主義は、法律は法律だというその確信によって、ドイツ法曹階級から恣意的かつ犯罪的な内容を持った法律に対して抵抗する力を奪い去ってきた。しかもそのうえに、実証主義は、自らの力で法律の妥当性を基礎づけることはまったくできない。法律の妥当性は法律が自己貫徹力を有することによって、とうに実証済みだ、と実証主義は信ずる」と述べて、「どのような法律も総統の決断で」制定され、「総統が唯一の立法者である」時代の不正義を指摘している。

ここで訳出する「権威刑法か社会的刑法か？」は、まさにナチスが法律、とくに刑法を駆使することによって権威主義、超個人主義的法治国家を形成していく過程の、ナチスの法律観の実態を如実に物語っている。ラートブルッフは、ナチズムを信奉する刑法学者の所説を広く掲げ、これを徹底的に批判している。ラートブルッフは指摘する。「ナチズムの前に姿を現している将来の刑法では、ある国民層、すなわちナチズム的国民層の世界観が全体の国民層に強制されることになる。《相対主義に別れを告げた》(グライスパハ)以上、中立国家、同じ権利を有するものとされる多様な国家思想観の抗争、政党の見解に対する寛容は、ナチズムには存在しない。自由な国家観においては、確信犯とはたんに思想を異にする者であって劣等人種ではなかったが、このような確信犯の観念は刑法から姿をけさねばならない。」「国家はその権力を全世界に示すために刑罰を利用する。刑罰のなかに国家の威厳が象徴的に表明され、死刑は、個人は国家に犠牲としてささげてもよい、ということを明示するものである」と。このナチズム批判論文を一読すれば、いわゆる「ナチス刑法思想」か、いったい何を目途として展開されていたのかが判然とする。それだけに、本訳稿冒頭に掲げられてあるように、この論文を掲載した雑誌は、発行停止処分を受けることになった。

超個人主義的な権威刑法思想傾向をもっとも嫌悪したのはラートブルッフであるといえよう。それはすでにこの「権威刑法か社会的刑法

か？」より 10 年以前に、「ラートブルッフ・ドイツ普通刑法草案」Gustav Radbruchs Entwurf eines allgemeinen Deutschen Strafgesetzbuch (1922) において明かである。(Eb. Schmidt, Einleitung in Gustav Radbruchs Entwurf eines allgemeinen Deutschen Strafgesetzbuches, 1952, S. VII., Th. Dehler, Geleitwort in Gustav Radbruchs Entwurf, 1952, S. V., 牧野英一「よりよき刑法と刑法よりもよき法律」『法律における理論と論理』、木村亀二「ラートブルッフ案」法律時報 25 卷 8 号、宮崎澄夫「ラートブルッフの刑法草案について」法学研究 28 卷 8 号参照)。ラートブルッフの立場は、師のリストに則して、改善主義を執っている。それゆえ、応報刑論、威嚇刑論を難じ「威嚇論も応報論も行為を行為者から、また行為者を人間から解き放すことを意味する。その場合に、根柢におかれた刑法上の行為者概念は私法の人格概念に相当する。伝統的な私法において、たとえば労働者が彼の労働力の個性を失った所有者で、〈労働という商品〉の売主 Verkäufer der Ware Arbeit であるように、応報および威嚇刑法においては、法違反者は彼の行為者の個性を失った行為者である。その場合に、刑法関係は部分的関係になるのであり、その関係に入ってくるのは全体としての人間ではなく、その行為の行為者のみである。個人主義的な労働関係観によれば労働力という商品が売られるように、それに相応する刑法観によれば犯罪が賠償される」とするものであって、(Rechtsphilosophie, 4. Aufl., 1950, S. 266)、さらに、「犯人は単なる〈行為者〉としてその個別的な行為との関係においてのみ考察され、素質並に社会的諸条件によって規制された人格、すなわち、生きた人間 lebhaft Menschen は閑却されてしまう」としている (Einführung in die Rechtswissenschaft, 9. Aufl., 1952, S. 131)。じつに、「応報思想を支持する諸議論は、テロリズム的な立場からこの思想が濫用される危険を考えると、その根柢を失うものである」(Einführung., S. 135)

応報思想並びに威嚇思想はナチズムが闊歩した時代に、法治国家の思想として、大量テロリズムの目的のために恐ろしい姿で出現した。ラー

トブルッフの日本における唯一の弟子常盤敏太教授は、はやくも 1934 年（昭和 9 年）、師ラートブルッフのもとにあって、「ラートブルッフを中心として——ドイツ法学最後の日と最後の人々」を著して、ナチ刑法をつぎの通り批判している。「ナチは、1933 年 2 月 28 日の法律によって、その年 1 月 31 日までの遡及効を認め、議會放火犯人ルッペを死刑に処したのである。法なくして刑が存在したことになる。かくして、19 世紀以来築き上げられた罪刑法定主義も不遡及の原則も、一朝にして再びナチ刑法はこれを否定せんとするのである。——罪刑法定主義の廃止について重大な変革は、意思主義刑法の採択である。在来の結果主義刑法および危険主義刑法を超えてここに到達したわけである。——ナチ刑法は、ナチ自衛卑怯法であって犯罪主義刑法に対する犯人主義刑法の主観的立場とは大いに異なることを知らねばならない。従って意思主義刑法と危険主義刑法との立場を混淆し、他方、応報主義をゲルマンの瀆罪感・道義感より惟称・復活させながら、その当然の帰結たる結果主義を排斥する等、ナチ刑法は刑法として生まれたのではなくして、暴君の恣意の剣として造られたという感を深くするのである。」（常盤敏太著『ラートブルッフ』鳳社、1967 年、100 頁以下）

訳者は、なぜ、この本訳論文が『ラートブルッフ著作集』全 10 卷（東京大学出版会）に収載されなかったのか知らない。だが、ナチスに敢然と闘ったラートブルッフの人と思想を学ぶ上で、「法哲学における相対主義」（Der Relativismus im der Rechtsphilosophie, 1934）に比べ、1 年ほど早く執筆されたこの論文がいかに重要なものであるか、いまさら論ずるまでもない。訳者は、かつてこの論文の試訳を札幌商科大学・札幌短期大学『論集』第 5 号（1970 年）に掲載したが、時を経て諸学者のラートブルッフ研究論文や翻訳に触れ多くのご教示を得たので、改めて原文と照合し、誤訳や不適切な表記を正し再刊することにした。

○ ラートブルッフ：権威刑法か社会的刑法か？（1933）

〔本論文は“Gesellschaft”第 10 卷第 3 号（1933 年 3 月）に掲載された

ものである。この雑誌は本稿を掲載したかどで発行停止処分を受けた。]

刑法の発生と発達、奇妙なことに歴史の史料によって解明することができない。ただ、刑法の起源と本質とが階級の対立と密接に結びついているということだけはいえる⁽¹⁾。

刑法の原形式として、一方では復讐および贖罪金による^{あがな}贖いの制度に、他方では宗教上の死刑に言及されるのが常である。後者についていえば、その生贄的性格の故に、キリスト教時代における発達とは直接に結びつかなかった。しかし、復讐と贖罪金の制度は、歴史上ある一定の時点に達して初めて廃止されたようである。

復讐と贖罪金との法は、平等の者、および同等の財産をもつ者同志の法であり、決闘申込みに応じ得る者たちと支払能力のある者たちとの法であった。しかし、やがて決闘(Fehde)を行なうにはあまりにも身分が低く、贖罪金を支払うにはあまりにも貧しい階層が上層階級の足もとで生長してきたうえ、これとの関連において、個人的できごとに端を発した犯罪が社会大衆的な現象となったため、この法は、もはや十分な用をなすことができなくなった。このような下層階級が形成されたのは、フランク時代においてであった。ゲルマン時代の奴隷は、みずから階級の内部にこもるか、あるいは少なくともその領国の内に閉鎖的であった。ところが、フランク時代の領主制荘園(Grundherrschaft)が成立すると、多くの奴隷がこぞって集中し、一方では、領主制荘園に隷属することになった自由人が、この奴隷たちと混交するに至った。これら等しく領主制荘園の配下となった人々の間では、自由人に対する公の刑法と領主制荘園の奴隷に対する刑法との差異が消滅した。こうして奴隷刑、すなわち、体刑、懲役、四肢の切断、そして死刑さえもが、かつての自由人に対しても適用されるようになった。この奴隷刑から刑法が発生し、これと共にすでに知られた刑事政策が登場した。フランク帝国の時代になって初めて「刑法の分野における立法政策が本来的な意味で問題とされるようになった⁽²⁾。」チルデベルト二世(Childeberts II)の勅命(596年)

において、強盜に刑罰を科する目的としてはっきりと強調されたものは、「あらゆる手段を講じて下層民に対する規律を維持すること」(disciplina in populo Modis omnibus observetur) であった。したがって、この新しい刑法は無産者のみに適用されたものである。贖罪金の体系からは、またこれとは別に、公の刑罰から金銭によって免除される制度が生まれた。こうして、この時から長い間にわたって二つの刑法、すなわち、有産者に対する刑法と無産者に対する刑法が存在した。貧しい者はその身体をもって贖うのに対し、富める者は金で支払ったのである。

復讐と贖罪金の体系においては、同権者が相互に競い合い、相対するなかで対決したのであるが、いまや科罰者が犯罪者に優越し、犯罪者は科罰者に対し屈辱的地位に甘んずることになった。これが刑法の本質であり、この関係は究極において、主人と奴隸という社会的階級の違いに立ちもどることであった。この関係についてはすでにニーチェ (Nietzsche) も直観的に認識している。「非難さるべきことは、贖罪金が蔑視される人間（たとえば奴隸）と結びつけられているような形で処罰されるようになったことである。多くの場合において処罰されるのは蔑視されている人間であり、こうしてついに刑罰のなかに輕蔑的な要因が入り込むこととなった⁽³⁾。」

この直観は、ある新しい刑法史家⁽⁴⁾ によって確認された。この刑法史家は、中世イタリアの刑法について以下のように論じている。

「社会的ないし道徳的な評価は消滅した。無産者、社会的地位の低い者、不名誉な職にある者および道徳的に低く見られる者たちは一まとめにして考えられ（「労働に従う者、卑しき業に従う者、悪しき者、浮浪する者」 laborator, rubaldus, vilis, vagabundus）、これらの階層に属する者と道徳的に汚名を受けた者とを同一に扱うことに対して、何ら疑念は抱かれなかった。すなわち、社会的外観は道徳的外観となったのである。」

こうして刑法は、その起源と本質から考えれば、他の階層、低い階層、卑しい者とみられていた階層の者による犯罪行為に対して設定されたのである。刑罰は、それが適用さるべき者の占める地位の変更 (capitis

deminutio) を社会の身分秩序ないし階級秩序を前提として行なうがゆえに、社会的な地位の変更であった。このことは、古来、上層階級に属する者が刑法に触れたような場合には、彼らを刑法の厳格さから救済するためのあらゆる試み——すなわち、贖罪金による釈放から始まって保護拘禁に至るあらゆる試み——が存在するという事実によって証明することができる。およそ、こうした試みは刑法史上を通じて繰り返されるところで、これについて研究することは、刑法の総括的概要を究明することと同等の価値を有するといつてよい。この事実、かなり後世にできたと思われるつぎの恥知らずな格言からも知ることができる。「不精者にふさわしいのは、高い税金か、高い絞首台のどちらかだ。」⁵⁾ “Zum Müßiggang gehören entweder hohe Zinsen oder hohe Galgen.”

しかし、叙上の前提が確立されれば、そこから生まれるのは、市民的・公民的平等のある社会の未来図であり、そして、それ以上に社会的平等のある社会の未来図である。この社会的平等の保たれた未来の社会においては、その起源と本質が身分社会ないし階級社会の制度に基づくような刑罰の生ずる余地はまったくなくなるであろう。このような社会においては、中傷的で感性だけで虚飾するような刑罰は、社会保障ないし社会福祉という冷静な施策や保安部分に、その王座を明け渡すことであろう。これはフェリ (Ferri) の草案が意図したところであり、ソビエト・ロシアが不完全ながら、その刑法典で実現したところである。つまり刑法の発達とは、刑罰を急進的な激情から分離して、これを冷静で合理的なものにすることである。

この意味で刑法における覚醒への道の決定的進歩は、今年5月29日、死後100年を迎える偉大なる刑法学者アンゼルム・フォイエルバッハ (Anselm Feuerbach) によって成された。彼は三重構造をなしている、利益・道徳・法を厳密に区別し、刑罰を専ら国家の合目的処分として正当化し、かつ「法律のないところに犯罪はなく、刑罰もない (Nullum crimen, nulla poena sine lege.⁶⁾)」なる原則を唱えて、刑罰はただ法律のみを根拠とすべきであるとした。かくして、彼は刑法の分野における

自由主義（Liberalismus）の提唱者となった。

しかしやがて、ヘーゲル（Hegel）の流れを汲むまったく異質の思想が彼の思想と結びついた。フォイエルバッハが法治国家の刑法の基礎を作ったとすれば、この思想は、その刑法のなかに、権威国家の刑法思想を溶かし込んだといえよう。すなわち、刑罰を、侵害された国家権威の回復であり、応報であるとみたのである。応報思想はその権威的性格とともに法治国家的にして自由な（liberal）側面を有しているので法治国家の思想とも結びつくことができる。まさにこの意味において応報刑は「法による刑罰」「Rechtsstrafe」なのである。応報刑思想は刑法を行為とのみ結びつけ、行為者の人格とは結びつけない。しかし、「人格を見ることをせずに」「Ohne Ansehen der Person」というのはまさに法治国家的スローガンであり、自由な法的安定性思想の発露である。なぜなら、人格を見ることによって行為の確定は明白にはなるが、人格心理学は微妙な点において誤謬の危険を内在する。あたかも自由な法治国家観が個人の人格でなくて純粹に均一的な「法主体」を問題とするように、また労働者を単なる「手」、すなわち、労働力の非人格的所有者ないし売り手であるとみるように、犯罪者をも、その行為の非人格的主体たる「行為者」としてのみみるのである。応報刑思想は、二個の外観上相対立する思想、すなわち、国家権威の思想と人間との平等の思想との結合によって成り立っている。この自由な刑法思想と権威刑法の思想とを結びつけた代表的人物は、おそらくカール・ビンディング（Karl Binding）であろう。

以上述べたことが、今日なお効力を有しているのは1870年制定の刑法の精神である。この刑法は、自由であると同時に権威主義的であるという奇妙な混合物であるが、これはちょうどビスマルク帝国自体が法治国家の性格と同時に官憲国家の性格をかねそなえ、「国家自由主義的」であったのとよく対応している。

この官憲国家の自由な権威刑法から刑法改革への転換はフランツ・v・リスト（Franz v. Liszt）によってなされた。リストもまた心からの自由の人であり、人がよく驚くのは、その刑事政策が行為者の人格の内

部にもっぱら向けられているのに、彼の刑法教義においては到るところで、外面的であり、可視的でかつ把握可能な徴表、すなわち、「客観主義理論」が優先し、すでに死滅した自然主義的時代観に基づく表現がもっぱら用いられていることである。実際は、彼の刑法理論における一連の客観主義的主張は、彼が刑法典について述べた有名な表記、すなわち、犯罪人のマグナ・カルタ (Magna Charta) と極言した、自由な法的安定性への要請から発しているものである。

しかしながら、リストは単に自由主義の後継者ではなく、社会的法解釈の先駆者でもあった。彼は犯罪を二重の意味での社会現象、すなわち、一方では社会的行為として、他方では逆に社会により制約される行動として把握した。彼は刑罰を本質的に、法を犯した者の再社会化と考え、また、法を犯す者を「行為者」であるのみならず、ある種の生物社会学的タイプであると考えた。すなわち、警告すべき瞬間犯、改善すべき改善可能な慢性犯、そして無害化すべき改善不能者という三つのタイプを考えたのである。こうして、単調な行為者概念の後から再び個々の人間が登場してきたのであるが、この個人化は自由な個人主義ではなく、自由な個人主義はこれと反対の概念——つまり人格の無視である。リストの個人化は個人のためではなく再社会化の目的をもったためのものであった。

リストの刑法理論を自由なものとみるのは正しいが、「自由主義的」「liberalistisch」なものともみるのは誤りである。社会的思想との関連からは同時に自由な法思维の「接触変成作用」「Kontaktmetamorphose」が同時に生じる。刑法の政治的根拠を法律だけにおいた点では、確かに自由であった。しかし、法律上の犯罪概念、すなわち、構成要件に該当する違法な可罰性行為の背後に、「実質的な犯罪概念」、すなわち、可罰的・反社会的行為を明確にみるという行き方は社会主義法思想と一致する。そこでソビエト・ロシアは、その刑法が実質的な犯罪概念にのみ立脚していることを誇っているが、これは、被告の利益にもなるが同時に不利益にもなる。すなわち、この国の刑法典の或る種の部分は、まだ判例によっ

て補足さるべく不完全な反社会的行為の戒例集にすぎない。これに対して、リストおよび刑法改革は、「法律のないところには刑罰はなく犯罪もない」とする原則を固持しており、被告の利益のために実質的犯罪概念を利用することを拒絶している。しかし被告人の利益のためには、実質的犯罪概念が今日の判例にすでに顕現している。法を超越する緊急避難がドイツ連邦大審院によって承認されたことの意味——すなわち、期待不可能性についての釈明の超法的根拠が法理論によって幾重にも承認されたことの意味——は現に犯行があるにもかかわらず、実質的な犯罪性（Verbrechenseigenschaft）を欠くがゆえに、可罰性を欠くがゆえに、また反社会的性格を欠くがゆえに、ついには違法性が阻却されること以外の何であらうか。

リストの公平にして社会的な刑法の体系は、「自由主義的」でもないし、また「ヒューマニズム化」をめざす刑法改革でもない。その前景にあるのは、刑法のヒューマニズム化の思想ではなく合理化の思想である。もし理性が犯罪人に無用な苦痛を与えることを禁じ、改革がその方向へ進むとしても、そしてその方向が合理化と同時に人道化を目指すものであったとしても、だからといって刑罰の軽減のみに向かうとは限らない。現実には、リストによって提起され、1918年の国家変改以来、ひとつひとつと部分的にはあるが実現され続けてきた改革運動は、その創始者の思想と矛盾し、問題の多い一面性においてのみ、かつ犯罪者の助けになる範囲においてのみ実現された。すなわち、確かに自由刑に代わって罰金刑が、刑の執行に代わって刑の執行停止が、刑罰に代わって教育処分が、広範囲の恩寵が実現したが、しかしながら改善不能な職業的犯罪者に対する保安拘禁“Sicherungsverwahrung”は未だ実現しない。改善不能性について生来の無能力ではなく教育者の無能力を認識するという考え方、誰をも、何をも、見捨てないという考え方、そして（リープマン（Liepmann）の素晴らしい言辞を借りるならば）改善不能性という事実は、単に理論上の真実であり、個々の者の改善可能性は教育的箴言とみなすべきだという考え方は、確かに事実上の刑罰執行の精神であらね

ばならない。しかしながら、他方では、刑法は改善不能性という悲しむべき事実の前に眼を閉じるわけにはいかないし、また刑法改革運動は、改善可能者の改善と同時に、改善不能者からの保安を強調することを決して忘れはしなかった。刑法の改革を脅かす危険を認識したうえで、国際刑事学協会 (Internationale Kriminalistische Vereinigung) は最近の学会で被告のみに一面的に作用する刑法改革についての疑問をくり返し指摘した。

今日までの刑法改革運動に対しては、さらにいま一つの非難を加えることができる。刑事政策に関する近年の最も重要な著作であるエクスナー (Exner) の「ドイツ法廷における刑罰量定の実際⁽⁶⁾」は、ドイツにおける刑事訴訟に当って刑罰の減量が年を追って進みつつあるという驚くべき現象を指摘している。すなわち、懲役刑は死滅し、自由刑は短縮され、ますます罰金刑によってとって代えられ、はじめ例外的であった酌量すべき情状が例外を重ねるうちに適用回数を増して規則と化し、酌量可能性は汲みつくされ、最高刑はめったに適用されない。これがまさに現在のドイツにおける刑罰量定の姿なのである。

しかし、この動きは、改善理論に支配されているのではなく、むしろ応報ないし威嚇思想の支配化にあつて遂行されている。すなわち、一つの刑罰が、応報主義的ないし威嚇主義的刑罰と同じように、単に苦痛を与えるだけの意味しかないと受け取られるような場合が、あまりにもしばしば起こるため、そのように受け取る社会的な感情がますます激しくなり、これが刑罰に対して抑制的に働く結果このような事態になったのである。もし刑罰が社会的に考えられ、社会にも被科罰者にも同様に奉仕するものならば、犯罪の社会的解釈がこのような意味で抑制的に作用することはなかったはずである。したがって、前述したような刑罰の酌量は、応報ないし威嚇的刑罰が、社会的な犯罪の解釈の介入により、その良心を失ったという事実に至り立ちもどるべきであり、したがってまた刑法改革におけるように、刑法の維持においても改革思想はその半分しか採用されなかったという事実——すなわち確かに新しい社会的な犯

罪の解釈がなされるに至ったが、社会的な刑罰の解釈はなされるに至っていないという事実にも立ちもどるべきなのである。

その上、刑法上の酌量の傾向を支持する批判者たちも、犯罪曲線の上昇に応じて刑罰の漸進的酌量を行なわねばならないという統計的な証明など何もしていない。それどころかわたくしが観るところでは、犯罪曲線の上昇は一時的なものにすぎず、しかもそれは常に反復される経済的・政治的危機によって明らかに説明がつくものであり、また犯罪統計の数値からは、良き刑法であれ悪しき刑法であれ、刑法の犯罪に与える影響はわずかなものであるのに反して、社会状態の与える影響は決定的であると思われる。そしてわたくしの考えでは、犯罪との闘いの最上のかたちは、刑法の改革ではなくして社会関係の改善である。

*

こうして、自由でかつ社会的な刑法の改革は、非難されているその誤謬を、その本来の思想の有する精気によって克服することができる。そのためには別に進行方向の転換を必要としない。しかし、ヘーゲルの三段論法的弁証法は、人々に時として魅力的な力を及ぼしてきた。そのため、1870年の自由な権威的刑法が社会的でかつ自由な改革運動により交代させられたように、社会的で自由な改革運動はまたそれ自身社会的権威刑法に道を譲るべきだ、との要求が起きている。しかし詳細に観察してみると、これらの諸改革においては、権威的要素のみが残されただけで、社会的という緯^{よこいと}は完全に没し去っている。このことは、明らかに国家社会主義的刑法改革者ヘルムート・ニコライ（Helmut Nicolai⁽⁷⁾）やその解釈者であるウィーンのグライスパハ伯（Grof Gleispach⁽⁸⁾）、さらに、はっきりと法学的に急進的とはいえない私講師ゲオルク・ダーム（Georg Dahm）やフリードリヒ・シャッフシュタイン（Friedrich Schaffstein⁽⁹⁾）にも当てはまることである。これら二人の刑法学的改革プログラムは（それらに対してなされる起草者たちの異論にもかかわらず）ドイツ国家的観念を反映しているのである。さらに先に述べたことは第三の

刑法思想を代表するアルブレヒト・エーリッヒ・ギュンター (Albrecht Erich Günther⁽¹⁰⁾) にも当てはまる。

H・ニコライとグライスパハ伯の二人によって表明されたナチズムの見解は、つぎの六つの点の特徴としている。

- ① ナチズムは、犯罪を本質的に社会的に条件づけられている行為であるとする社会的見解に反対する。ナチズムには「犯罪素質論への傾斜と犯罪環境論からの説明もしくは犯罪環境論の弱退化が認められると言っても間違いではない」(グライスパハ)、「遺伝される素質という事実はすべての考察の出発点として考慮されてもよい」(ニコライ)。こうして、経験科学的問題である「素質か環境か」の問題は世界観的見解により驚くべき確信をもって解決されるのである。
- ② しかし、生来の劣等者ならば矯正され得るはずである。したがって素質論の結論としてナチズムは「選り抜き」のそして「一般的動機づけ」の刑法、したがって無害化 (Unschädlichmachung) と威嚇との刑法を、すなわち、純選択的威嚇刑法を掲げる。死刑、終身隔離、優生学上の断種が関心の中心となる。「刑の執行における教育は決して否定されるべきものでないが、しかし教育刑としての刑の執行は、判決を受けた者のうち、無きに等しい僅かばかりの者にとつてのみ問題となる」とはナチズム的刑法理論の主唱者の言うところである (グライスパハ) が、さらにもう一人の提唱者にあつては、その言い方はもっと決定的となる。すなわち、「刑罰は犯罪人の改善とか純化を目的とするものではない。欠陥のある素質を改善するなどということは、何人にもできないことである」とニコライは言うのである。こうしてナチズムは、第一に模範的刑務所の所長を、続いて大いに功績のあったチューリングゲンの模範的教育刑としての行刑に最後の一撃を加え始めたのである。
- ③ 罪が本質的に社会的に条件づけられた行為として把握されないと同じく、ナチズムにとって、犯罪はまた本質的に反社会的行為としても映らない。犯罪は社会 (Gesellschaft)、すなわち個人の総数に

向けられたものではなく、人種として把握された民族共同体 (Volksgemeinschaft) に向けられたものとみなされるのである。「ドイツ民族共同体を高度に訓練すること」(グライスパハ)、「生命に敵対し正義を害する墮落から民族を守ること」(ニコライ)が刑法の目的である。

- ④ 刑法が社会に奉仕する限り、再社会化 (Resozialisierung) という目的はある程度客観的に把握できる。たとえば、誠実、勤勉、穏和などの社会的価値はそれが可能な限りにおいて、世界観の争いの圏外にある。しかし、個人を超越したものとして考えられた民族共同体の価値は、あらゆる世界観、あらゆる国家観、あらゆる政党により異なる定義を与えられており、その価値に基づいて刑法を行使することは、これらの見解のうちの特定の一つを普遍的に妥当する見解にまで高めることを意味するわけである。事実、ナチズムにおいて「共同の根本的確信」(ニコライ)が刑法の出発点と目標とを兼ねるものとされた。

すなわち、「個々の人間が自己に対して自らの行為の法律として構成することができるような規範ではなく、国民層内部の絶対的有効性への要求をもって完全に客観的に考案された規範」(グライスパハ)こそが刑法の出発点であり目標である。

こうしてナチズムの前に姿を現わしている将来の刑法では、ある国民層、すなわち、ナチズムの国民層の世界観的政治観が全体の国民層に強制されることになる。「相対主義 (Relativismus) には別れを告げた」(グライスパハ)以上、中立的国家、同じ権利を有するものとされる多様な国家思想間の抗争、政党の見解に対する寛容はナチズムにとっては存在しない。自由な国家観においては、確信犯とは単に思想を異にする者であって、劣等人種ではなかったが、このような確信犯の観念は刑法から姿を消さねばならない。

非ナチズム的色彩の確信犯、すなわち、「マルクス主義者」はナチズムにとっては墮落した者のうちの最も墮落した者、根本からの劣

等人種なのである。

- ⑤ 国家社会主義的刑法理論では、上記の如き独自の世界観の絶対化と関連して、一風変わった法と倫理の関係についての見解がある。彼等によって「法と道德のローマ的分解」(ニコライ)と呼ばれるドイツ観念論、すなわち、カント (Kant)、フィヒテ (Fichte)、そしてフォイエルバッハ (Feuerbach) のような哲学者たちの哲学と刑法理論の偉業は、ナチズムにとっては単に自由主義的偏見に過ぎない。「これら二つの規範体系の矛盾を容認することは絶対に許せない」(グライスパハ)。「法とは道德である」ということは「刑罰は名誉毀損である」ということ以外の何ものも意味しない。

こうして、思想を異にする者の名誉毀損はナチズムの刑法思想の必然的帰結である。以上のような刑法観を法典に編纂したものがあの悪名高い 1930 年 3 月 12 日付のドイツ国民保護法というナチズムの草案であって、この草案の中には、ナチズムの見解によれば、民族および祖国に敵対するとされる信念の表明に対して、数多くの死刑を規定してあった。

この笑止すべきであると同時に驚くべき草案は、ナチズム自身ほとんど宣伝の材料としてしか見ていなかったにもかかわらず、グライスパハはその中に「学問的研究ならびに学問的に形成する価値のある思想内容」があるとし、「ドイツ国民ならびにその英傑たちの名誉と尊厳、ドイツ民族の創造性、なかんずくドイツ国民性」を刑罰をもって擁護することを要求している。ダームとシャッフシュタインもまたその後「国家の尊厳と国民の名誉」を持続的に擁護しようとの意見を表明している。しかし、「ドイツ刑法から外国の諸思想を消し去ること」(グライスパハ) が要請されているにもかかわらず、また、「二千年の法の歴史の経過する中で、われわれの内に外国財産として侵入してきたものは、すべて除き去らねばならない」(ニコライ) としているにもかかわらず、上記の草案は明らかにイタリアの範例が基礎になっている。それに、ドイツの刑法はその継受と啓蒙

以来、一つの国際的形態なのであり、もしニコライの見解に従うならば、除去すべきは、われわれの刑法のほとんど全体ということになる！

- ⑥ こういう背景のもとに、ナチズムが要求する「行為の動機を注意深く考慮すること」（グライスパハ）がその危険な意味全体を初めて表わしてきた。ここでは行動の動機を推測する規準は、行為者自身の確信ではなく、特定の世界観的政治観という「客観的」規準なのである。これによって法道德の二重化の危険が現われる。すなわち、法の二重化、つまり党员のための法と、政敵のための法とに二重化される危険である。この点に関しては、アルフレッド・ローゼンベルク（Alfred Rosenberg）がポテンパ事件の判決（Potempa-Urteil）について「人民の監視者（Völkischen Beobachter）」誌上に表明した見解を想起するだけで十分であろう。すなわち、ローゼンベルクによれば、人間は誰もが一律なのではなく、殺人もまた、どの殺人もみな同じとはいふことはできない。したがって、フランスにおいて平和主義者ジョレス（Jaurès）を殺害したことが、国家主義者クレマンソー（Clemenceau）に対する殺害未遂とその評価が異なって与えられたのは当然のことであり、祖国愛の動機から過誤を犯す行為者を（ナチズムの見解によれば）反民族的な動機から過誤を犯す行為者と同じ刑罰に服させることは不可能である、とローゼンベルクは言うのである。

ナチズム的刑法思想が人種的に把握された民族共同体というものに方向づけられている一方、ドイツ国家的刑法思想はまったく国家の権威により組織立てられている。ゲームとシャッフシュタインは、彼等と見解上では血縁関係にあるナチストよりもはるかに精神的上位にあり、はるかに思慮深い控え目な態度を示している（この二人は、その共同執筆になるパンフレットのなかですら、それぞれのペンは明らかに区別できる。すなわち、一方は感覚が鋭敏で他方は疑うことを知らないという特徴がある）。彼等が「新しい刑法観」を「最

後の緊急命令という意味」のなかに探求するとき、彼等の見解は確かにその意味を超えたものになる。しかし彼等は、「素質か環境か」という疑問に対しては、ナチストたちよりはるかに注意深い態度をもっており、保守的世界観から「素質の影響と退化理論を強調し過ぎて、そのため普遍的に教育不可能を結論づけないように」注意を促しているのである。したがって、彼等は矯正、特別予防に対しての彼等なりの「限界ある領域」を保持し、「卓越した教育家の指揮のもとに顕著なるものが達成された」として、チューリングゲンにおける教育としての刑の執行についてさえも讃美の言葉を見出すのである。しかし、彼等が別の個所で、「数十万の人間がその自由意志から軍事的強制に従い、また、ドイツのすべての政党がその政治教育のおそらく最も有効な部分を軍隊に類似した組織を通じて行なうようになる時代には、刑の執行すら、『軍事的厳格さと教練』の特別な教育的意義が強調されるだろう」と述べている（さすがに近代の教育機関としての刑務所を戦前の兵舎にしようとはしないでいるが）のは、先の見解とはほとんどつじつまが合わないであろう。これと同様に、彼等のチューリングゲン讃美と相容れない点として、個々人を独自の改善された自己に引き上げようとする自律的教育理念を、彼等が拒否していることが上げられる。ダーム＝シャッフシュタイン理論は、この異質的教育理念に代わるものとして、「権威的国家観」「国民的思想」「ドイツ文化の伝統的価値」、さらに、「民族共同体」なる思想を階級闘争の思想の対極として掲げている。この見解に従えば、刑の執行は、政治犯をある定まった国家理念をもつべく強制教育を施すことをその任務としなければならない。したがって確信犯の概念、すなわち「社会的にして自由な刑法の青白く内容の乏しい国家理念の古典的見本、中立的国家の古典的見本」は非難されなければならない。「凡そ国家は、自己を信じ、自己を含む国民思想を信ずる限り、犯罪人に対する国家の倫理的優越を疑問視させる動機等は絶対に有することがない。」この「自己を信ずる国家」という神

話の背後には、誠実な社会学的思想といえども、ただ国家の内部にあって自己を信ずる特定のグループを見るだけで、それ以外何ものをも発見することはできない。この兩人の主張している最高度に個人的な「信仰から来る政治」とか、「若い世代の立場」とかいうものは、したがって、思想の異なっている者に刑罰としての教育を強制する権限をもっていると自ら信じている政治なのである！

しかしいかなる国家も「各個人の魂を救済する」任務などはない。刑罰は、矯正の目的以前に、威嚇の任務以前に、そして犯罪との闘いという現実の要請以前に、「正義の同志が全体として参加している共同劇」であることの任務、（流行語を用いるならば）国家の統合という任務を負うのである。彼等はいふ。「国家はその権力を全世界に示すために刑罰を利用する。刑罰の中に国家の威厳が象徴的に表明され、死刑は、個人は国家に犠牲として捧げてよい、ということを示す。」ああ、人間が悲壮になるとこんなにも怖いことを言い出すのか！ 無害化が不可避だとするならば、その冷やかな手段としての死刑はいずれにしろまだ理解することはできるが、しかし、偶像たる国家に捧げられる祭祀的贖罪の犠牲としての死刑は、われわれには耐えられないものである。われわれは「裁判の誤謬を恐れるあまり死刑の過度の執行を避ける」という典型的に自由な恐怖感」からは完全に解放されないかも知れないが、それでも結構である！

これに比べるならば、アルブレヒト・エーリッヒ・ギンターが讃意を表していた権威刑法の性格の方がまだ我慢できる。ギンターは、「法の政治的性格を明らかに回復して、これをその社会的誤解から解放したい」と公言している。彼によれば、「刑法は社会の利益を守るためのものではなく国家の名誉毀損を償うためのものである」という。「規範の下にある臣民の不服従によって国家の尊厳が傷つけられることが、刑罰の理由であり、またこの尊厳の毀損を回復することが、刑罰の目的である。」「処罰は見せしめのためのもので

あって、国家は、法侵犯者の例によって規範に服している者に国家の法秩序の強制を具体的に示しているのである。」「したがって、行為者ではなく行為が刑罰制度の中心点に立つ結果となる。」こうして、円環が完全にできあがった。

われわれは、われわれの出発した点に到達したのである。すなわち、はじめに述べたカール・ビンディングのところに戻ったのである。ギュンターの理論は、権威刑法思想と並んで、ビンディング流の刑法思想の自由な要素をも欠いていない。行為者刑法は退けられなければならないが、それは「人格の内奥に在るものを官僚の具に明け渡すことを意味するからである」と彼はいう。この教育刑法のうちにこの自由主義で正統的でありかつ自由な敵手は、まれにみる概念の顛倒をしつつ「正に自由な刑法改革の瀆神的不遜」をみるのである！

＊

刑法の権威的イデオロギーの背後に社会的下部構造を顕わすことをわれわれは放棄する⁽¹¹⁾。ここでもある種のイデオロギーのアカデミックなファンファーレは、それを響かせる風がどこからくるのか知らないことが、いかにたびたびであろう。権威的国家観および刑罰観は資本主義の国家観以外の何ものでもない。この資本主義とは、プロレタリアートを向こうにまわし、プロレタリアートの勝利を意味するであろう民主主義をも向こうにまわして、決戦を挑まんがため独裁の内域に立てこもってしまったものである。この資本主義的イデオロギーの社会学的基盤を示すことよりも重要なことは、現時点において、労働者階級にその社会的な力とかのイデオロギー、すなわち、つねに労働者階級の最良の闘争手段であったあのイデオロギーを思い起こさせることである。さらに、思い起こして欲しいのは、社会主義は確かに自由主義に対抗するものとして出発したものであったが、最後に考えられた自由主義として、自由主義を出発点として発展したものであること、社会主義の最良の部分が

生き続けていること、そして社会主義はなるほど経済構造を意味するものであるが、同時に精神の自由をも意味することである。われわれは、それゆえにこそ、戦闘合図を相互に呼び交わすに際して、社会主義の魂をもって「自由を！」と叫ぶであろう。

注

- (1) リヒャルト・シュミット (Richard Schmidt) の注目に値する発言。「刑法慣習の諸問題」(Die Aufgaben der Strafrechtspflege) 1895 年所載。またケストリン「ドイツ刑法史」(Köstlin, Geschichte des deutschen Strafrechts) 1859 年にも既にみられる。
- (2) リヒャルト・シュミットの前掲書 159 頁参照。
- (3) 「権力への意思」(Wille zur Macht) Aph. 471
- (4) ゲオルク・ダーム「中世末期におけるイタリアの刑法」(Georg Dahm, Das Strafrecht Italiens im ausgehenden Mittelalter) 1931 年、25 頁以下参照。
- (5) 法律のないところに犯罪はなく、刑罰もない。(Kein Verbrechen, Keine Strafe ohne Gesetz.)
- (6) エクスナー「ドイツ法廷における量刑の実際についての研究」(Exner, Studien über die Strafzumessungspraxis der deutschen Gerichte) 1931 年参照。
- (7) ヘルムート・ニコライ博士 (ドイツ国家社会主義党行刑局国内政策部長) 「人種立法の法理」(Dr. Helmut Nicolai, Leiter der Innenpolitischen Abteilung der Reichsleitung der NSDAP., Die rassengesetzliche Rechtslehre) 1932 年参照。
- (8) 国際刑事学協会 (Internationalen Kriminalistischen Vereinigung) のフランクフルト学会報告 (Frankfurter Tagung) 1932 年 9 月刊参照。
- (9) ゲオルク・ダームおよびフリードリヒ・シャッフシュタイン共著「自由主義刑法か權威刑法か」(Georg Dahm (Heidelberg) und Friedrich Schaffstein (Gottingen), Liberales oder autoritäres Strafrecht?) Hamburg, O. J., Hanseatische Verlagsanstalt.
- (10) アルブレヒト・エーリッヒ・ギュンター「国家社会主義に何を期待するか」(Albrecht Erich Günther, Was wir vom Nationalsozialismus erwarten) 1932 年、100 頁以下参照。
- (11) この問題は、フーゴ・マルクス (Hugo Marx) か "Justiz" 誌上に初めて発表した論文において提起されたもので、その原稿は現在わたくしの手もとにある。

Autoritares oder soziales Strafrecht? aus dem letzten Heft (X. 3) der

Zeitschrift Die Gesellschaft, 1933 ; in : Der Mensch im Recht (Vorträge und Aufsätze), 2. Aufl., S. 63ff.

2. ペーター・ギュンター、愚か者にして英雄 訳者まえがき

本文は Gustav Radbruch, Peter Günter-Narr und Held, in: *Elegantiae Juris Criminalis*, 2. Auflage, 1950, S. 130 ff.の全文を訳出したものである。

この“*Elegantiae Juris Criminalis*”と題する書は、1938年11月21日、ラートブルッフの第60回目の誕生日を祝して、彼の刑法史に関する研究論文を編集したものである。初版では7篇の論文が掲げられていたが、1950年第二版では14篇の論文によって構成されている。※

この書は、ラートブルッフの「本来の愛着が実は法の領域外の精神的領域に向けられていた」⁽¹⁾のために、“*Grenzbreyel*”という標題のもとに公刊される予定であった。だが、ラートブルッフはこれを“*Elegantias Juris Griminalis*”と定め、この標題は「これらの研究を生んだ源である楽しい歴史的な好奇心を示すもの」⁽²⁾とせられ「もちろん、これらの研究方法は、すなわち18世紀の優雅な法学とは何らの共通点もないその方法」⁽³⁾を示すものではない、とせられている。「つまりこの書物は、法的、社会のおよび精神的な観察方法を結びつけ、……ひとつひとつ具体的状況の理解に関して、それらの方法を適用しただけではなく、目前にあらわれる史実の理解にも適用して……そうすることによって、ラートブルッフは、彼の法哲学上の諸著作と同じ意味において、改革的かつ教育的意義を与えられている。それゆえ、この書物は彼の全研究生活の中心的成果を成している」⁽⁴⁾と言っても決して過言ではないのである。

またこの書物は、ラートブルッフの生涯の「回顧を促されている」⁽⁵⁾時期に書かれたという意味で、彼の広範な研究領域とその多様性から抽出されたものほかならない。したがってこの書物は、そのあらゆる部分において彼の形而上的考察の、つぎの段階に対する予見性をすでに含んでおり、徐々に行なわれた内面的深化に対する認識が、本書によって可能

になっている。この内面的深化は、ゲーテの現世界肯定の思想から出発し、シュプランガーの「現世信仰」に類する姿相を経て、キリスト教との再会にいたり、こうして、一語一語強められ、かつ深められる宗教心は、ラートブルッフの寛容な心をして、人々を感動的に法へと結びつけるものである⁽⁶⁾。

ルターの正教の時代のリューブックの刑事事件である『ペーター・ギュンター，愚者にして英雄』は、この時代を明かす悲劇的歴史として、神学的な背景をもっている。この作品では、宗教的信念に基づいてキリスト教の神聖を否定した一人の職人に対する訴訟経過が処刑に至るまで説述されており、この反「三位一体論」を扱った考察方法は、神学のおよび教会法的な領域の究明を中心に「法における確信犯」の根源をさぐり、啓蒙的な人文主義を求めて、読者をして「法における寛容」へと導こうとするものであろう。

筆者の知るところでは、いまだ“Elegantiae Juris Criminalis”に収められている作品の紹介がなされていない。かつて筆者はラートブルッフの『主知主義について——断章』（Überden Intellektualismus—Ein Fragment—⁽⁷⁾）や『法の宗教哲学』（Religionsphilosophie des Rechts⁽⁸⁾）の訳出を試みましたが、ラートブルッフの説く《法の宗教哲学》における『ペーター・ギュンター，愚か者にして英雄』の位置の重大さを痛感した。以下の訳出は、まことに試訳の域を出ないもので、なお多くの誤訳や不適切な表現を包含している。それだけに、ラートブルッフの原文がもつ高雅な文意文体をどの程度まで日本語に移しえたかは疑わしい。読者の叱声を賜らんことを。

※

- Der Ursprung des Strafrechts aus dem Stande der Unfreien.
- Planetarische Kriminalanthropologie.
- Hans Baldungs Hexenbilder.
- Der Raub in der Carolina.

- Lieb der Gerechtigkeit und Gemeiner Nutz. Eine Farmel von Johann von Schwarzenberg.
- Cicero deutsch. Zu Johann von Schwarzenberzs Officien-Übersetzung.
- Schwarzenberg-Bildnisse.
- Die ersten Zuchthäuser und ihr geistes geschichtlicher Hintergrund.
- **Peter Günter-Narr und Held.**
- Ars morieudi. Scharfrichter-Seelsorger-Armersunder-Volk.
- Kriminalistische Geetfe-Studien
 1. Goethe und Schwarzenberg.
 2. Goethe und K. F. Hommel.
- Isaak Iselin über Cesare Beccaria.
- Anselm V. Feuerbach und die vergleichende Rechtswissenschaft.
- Franz v. List-Anlage und Umwelt.

注

- (1) Elik Wolf, Großes Rechtsdenker, der deutschen Geistesgeschichte, 4. Aufl., 1963, S. 745.
- (2) Radbruch, *Elegantiae.*, Vorwort.
- (3) Radbruch, *Elegantiae.*, Vorwort.
- (4) Werner Maihofer, Die Natur der Sache, in ARSP., Bd. 44, 1958, S. 151.
- (5) Radbruch, *Elegantiae.*, Vorwort.
- (6) Elik Wolf, a. a. O., S. 745.
- (7) 常盤敏太著『ラートブルッフ』(鳳社、1968) 308 頁以下。ラートブルッフの宗教観の集約として、G. Radbruch, *Aphorismen zur Rechtsweisheit*, 1963, S. 86 ff.がある。A. カウフマン編『G. ラートブルッフ：法思慮への箴言』Ⅳ、札幌商科大学・札幌短期大学『論集』、第 20 号 (1977 年)、139 頁以下。なお拙論「法における懐疑と信仰」、札幌商科大学・札幌短期大学『論集』、第 9 号 (1972 年)、1 以下。
- (8) 拙訳として、ラートブルッフ「法の宗教哲学」、札幌商科大学・札幌短期大学『論集』、第 2 号 (1969 年)、47 頁以下。

○ラートブルッフ：ペーター・ギュンター、愚か者にして英雄（1938）

1687年2月13日（日曜日）のことである。リューベックの鍛冶屋徒弟たちは、ミューレン街の鍛冶屋でもある居酒屋で、彼等の月例の会合を開いた。彼等はいつものように午後3時には集まって、最初は共通の問題について意見を交わしあい、4時には飲みはじめ、それが夜まで続いた。夜もふけて皆がわいわい騒いでいた時に、2人の徒弟の間で激しい殴り合いがはじまった。殴り合いがはじまったと聞いても別に珍しいことでもないようなものだが、この激しい殴り合いには、実は特別の理由があった。すなわち、ペーター・ギュンターと称するクリスマス以来ずっと親方であるエーリッヒ・ブーデーのところで働いている徒弟が、われわれの主であり救世主であるキリストに対して、けがらわしい冒流的な言葉を吐き、それが原因で、その後3日たって裁判官に逮捕されたのである。パオホーフの親方クラインシュミットのところで働いている徒弟ヘルマン・ドールマンとその仲間たちは、ペーター・ギュンターに関するこの経緯について聞きたいと思っている人々すべてに対し、とくに彼らの懺悔牧師に対して、後日裁判官の前でも証言したように、およそつぎのように語ったのであった。会合がはじまって間もなく、店の主人が飲み代を集めはじめたころから、すでに徒弟たちの間では宗教上のことがらが話題にのぼっていたのである。仲間が神の御子キリストについて語ったとき、ペーター・ギュンターは、これに耳を傾けようとはせず、「そんなことを言うのなら、われわれすべて神の子だ。そしてキリストもわれわれとまったく変わりのない罪人だ」と叫んだ。仲間の一人に「それではお前は、いったいわれわれの救い主にどんな罪を見つけたのだ」とたずねられると、ペーター・ギュンターは、「キリストが12才のときに両親の言つけを守らないで寺院に残ったのは罪深い行為ではないか」と答えた。さらに、他の一人が、「お前はそれでも父と子と聖霊の名において洗礼を受けたのに、どうして信仰をぐらつかせるか」と咎めると、ペーター・ギュンターは、「それはそうだが、自分は今ではもう三位一体 (Dreifaltigkeit) を信じていない」と言い返した。このようにして、

さらにさまざまな議論が延々と交わされたのである。

やがてペーター・ギュンターは中庭へ出たところで、シュトラールズント出身の一人の徒弟と出合った。この男は日ごろから宗教上のことについて何ごととも熟知していると自称していた者である。そこでペーター・ギュンターは、この男に向かってつぎのように話しかけた。「シュトラールズントで教会に三度も雷落があり、三度目は、ついに聖壇のキリスト磔刑像の後にあったパンと聖杯と聖餅が雷に打たれてこなごなになったのを、いったいお前は思うかね？　これは神の御業でなくてはなんだろうか？」シュトラールズント出身のこの男は、ペーターに尋ねかえした。「しかし、お前はヘルマン・ドールマン・ゴスマン師をどう思っているのだ？　彼はキリストによって人々が幸せになると信じなければキリストを説きはすまい？」すると、ペーター・ギュンターは、「彼はそうではないことを知っているのだろう。しかし、教区の民衆を苦しめ続けるために打明けないでいるのだ」と言うのだった。

二人が再び酒場のなかへ入ったとき、ペーター・ギュンターは区裁判所の走使いと親方の息子ミッシェル・ハーベと再びキリストについて議論することになった。ペーター・ギュンターと彼らが論争している最中に、先に述べたヘルマン・ドールマンがやってきた。ところが卓の周囲の騒ぎは、会合が9時から10時にさしかかるときには、いつも起きるもので大げさなものではなかったもので、数人の人々、とくにマルクス・ゲートエンスとヒンリッヒ・ケンネヴィフの二人は、つぎの会話をはっきりと聴き取ることができたのであった。ヘルマン・ドールマンは、ペーター・ギュンターに対して、「ペーター、よくもそんなことが言えたものだ？　それなら西暦何年（n. Chr.）などどうして書いたりすることができるのだね？」と尋ねた。すると相当に酒を飲んだうえに議論に熱中し腹を立てていたペーター・ギュンターは、「何がキリストだ。ジェスイット Jesuit がはじめてこの悪党からこんな偶像を作り出したのだ」と叫んだのである。このけがらわしい冒涇の言葉を聞いたヘルマン・ドールマンは、「わたくしの救い主を罵るのか」と叫びつつ、ビール樽の破片や

書き物用の敷板でペーター・ギュンターに打ちかかり、終には力いっぱい殴りつけたのであった。ペーター・ギュンターが「神を冒瀆した覚えは少しもない」と反駁し、さらに「まともな人間ならわたくしにそんな罪をなすりつけてはいけない」と言ったけれども全く無視されてしまった。騒ぎが静かになってから、ペーター・ギュンターは、マルクス・ゲートエンスとヒンリッヒ・ケンネヴィフに「酒をおごろう」と言ったのだが、二人はこれを断って彼に恥をかかせた。けだし、ヘルマン・ドールマンが「ペーター・ギュンターといっしょに飲む奴は悪党で泥棒だ」と言ったからであった。

われわれの救世主を呪ったこの呪われた男は、今やアルテン・シュランゲンの監獄で悲しい日々を送り、聖書やヨハン・アルントの『楽園』“Paradisgartlein”などを読んで時を過ごしていた。キリストのことが話になると、彼はいつも、心のなかで三位一体でない偶像のことを考えていたのは勿論であった。彼は、普通の人ならばすでにマイスターになっている 34 才の徒弟であったが、その内気な性質からそのことをあまり気にかけている様子はなかった。彼の親方であるエアリッヒ・ブーデが裁判官たちの前で証言したところによると、彼は、実に信心深い徒弟で、努めて神の御言葉にしたがって教会に通い（聖晩餐には行かなかったにせよ）、家に在っても努めて賛美歌「わが心の奥底より」、「主よ、われは感謝す」、その他多くの朝歌または食事時の聖歌を唱っていたのであった。彼はつねに心穏やかであり、協調的であった。そしてあの騒がしい会合でもいつも静かに座っていた。ただ、話題がひとたびキリストのことになると、いつも熱中して怒りっぽくなり、歯を食いしばって議論するのだった。監獄のなかでもこの様子はまったく同じであった。教戒師が彼にキリストの血について語りかけると、ペーター・ギュンターは「何がキリストだ！」とはげしく反論するのだった。僧侶たち、とくに聖ヤコブ教会の僧侶エーマンは、彼を改宗させようとする熱心さから、またキリスト教的な憐れみの心から、しばしば監獄を訪問したが、この強情な男をいかんともすることができなかった。僧侶たちがキリストの名を

口にするだけで、ペーター・ギュンターはまるで、ひざの関節に鉄棒を差し込まれたかのように立ち上がって怒り狂った。キリストの名が唱えられると、地面に居座っている者でさえ、さらにひざを屈しないわけにはいかないにもかかわらず、ペーター・ギュンターは決して膝まづこうとはしなかったのである。人々がペーター・ギュンターにキリストを神として崇めるに論ずと、彼はむきになって「キリストは神でない。ただの人間にすぎない。もし、キリストが神ならば、わたくしが晩飯を食べるさい、喉から焰が出るようにして神である証拠を示すがよい」と叫んだ。面に居座っている者でさえ、さらにひざを屈しないわけにはいかないにもかかわらず、ペーター・ギュンターは決して膝まづこうとはしなかったのである。人々がペーター・ギュンターにキリストを神として崇めるように論ずと、彼はむきになって「キリストは神でない。ただの人間にすぎない。もし、キリストが神ならば、わたくしが晩飯を食べるさい、喉から焰が出るようにして神である証拠を示すがよい」と叫んだ。(こういう彼は、つねに火焰、雷電や業火のことをよく口にした。)また、人々が彼にパウロの言葉「主イエス・キリストを愛さない者は呪われて死ぬ」と説くと、ペーター・ギュンターは「キリストを信ずる者こそ呪われているのだ。ルター派の輩どもよ、神はお前たちの間にも御腕を現されたというが、誰がそれを見たか？」と発撥するありさまであった。人々がペーター・ギュンターに「お前がそうして否認するものがお前の裁判官となり、もっとも恐るべき永劫の罪だけしか、お前は期待できないのだ」と告げると、彼は憤然として「キリストにわたしを呪わせるがよい。しかし、キリストとはいったい誰のことだ。わたしはどうしてもキリストを信じない。どうして人々はこんなにも骨を折ってわたしにキリストを信じさせようとするのか？ 天使も人間もわたしの考えを変えることはできまい」と答えた。チルジドにいた彼の母親からの手紙も彼を動かすことはできなかった。母親は彼にその洗礼のときの誓約、教義問答、子供の守るべき孝徳心などについて思い出させるよう努めたのであったが、結局、この僭越な男は、「汝よ、わたくしになんのかかわ

りがあるというのだ」という言葉に思い至っているふうであった。

ところがたった一人ペーター・ギュンターが心を許した人があった。それは有名な神学者ヨハン・ウィルヘルム・ペーターゼン博士 (D. Johann Wilhelm Petersen) であった。彼はリューベック生まれで、当時オイチンの地方監督官の要職にあった。彼は愛情深い人であり、後日、彼の一千年至福説でさまざまな目にあった人物である。彼は妻のリイブステン（妻はメルラウ生まれ）と共によくペーター・ギュンターを訪ねた。そして後には、彼ら夫妻は、ペーター・ギュンターのために市長ヒンリッヒ・ケルクリンクを動かしてよりよい部屋を与え、清潔な衣服を都合してやるなどしたものだった。ある時、彼ら夫妻が優しい言葉で、キリストはわれわれの救世主であり、神であることを説論すると、ペーター・ギュンターは「わたしは三位一体の神を信じていたときは、神に背向いていたが、一人の神を信ずるようになってから、はじめて神を畏れるようになった」と語ったのである。そこで彼らがさらにペーター・ギュンターに、三位一体の本義を教示すると、ペーター・ギュンターは静かになって「もし、キリストが本当の神であるのならば、わたしはキリストをも共に礼拝する」と述べ、そして、そのすぐ後であたかもひとりごとのように「ああ、存在するのは唯一の神だ。神はたったひとつであり、それがすべてである」と言うのであった。裁判官たちは、どうしてこの被告がわれわれの主人であり救世主キリストを神でない、という畏れ多い考えを抱くにいったかを調べるために、さまざまな手をつくした。この点についてのペーター・ギュンターの陳述はつぎのごとくであった。いわく「わたしは以前は、キリストは神である、と信じておりましたが、後になって考えが変わったのです。わたしは神を信仰しない人々が恥辱的な振舞いをし、聖晩餐についても無関心であるさまを見ました。そこでわたくしは、神にお祈りをして、もし人々がキリストを信ずべきであれば、夢の中で十字架につけられた人と出会わして下さい、と願ったのです。ところが、4年前 Charwoche の時(すなわち、イースターの前週)までは、夢には何者も現れてきませんでした。その時、わ

わたしはプロイセンの Neukirchen 家に居りましたが、仕事場に座っていると突然一つの星が輝き、その光がわたしの胸を照しました。わたしは床にひざまづいて、さらに一生懸命をお願いをし、苦悩するキリストをお示し下さるようにと祈ったのです。しかし、それが現れなかったのでわたしは神を讃えて、それ以後というものは神のみを信ずるようになったのであります。それから数日たったある日、わたしは床に入り横になるや否や、まぶしい光で照らされました。つぎの瞬間、わたしは眠りおちてしまい、つぎのような夢を見たのです。『わたくしは、夕方、どことも知れぬ町へ出かけ、ある一軒の家に入りました。その家では大勢の人々が踊ったり跳ねたりしてとても楽しんでいました。ところがどうしたとか、わたしの鼻から水が出てきたので、その家で横になり休ませてもらいました。しかし水は眼、耳、口からも流れ出て、まるで小川のように人々の間を流れるのでした。人々はわたくしを慰めてくれ、そのためか水は程なくおさまりました。その後、わたしは燃える燈をもって小道を進んでおりました。すると突然風が吹いてきてその燈を消してしまいました。わたしは暗闇のなかを手探りで歩かなければならぬはめになりました。ちょうどその時、そこへ一人の少年が燃える燈を手に向こうからやってきました。尋ねると、彼は、結婚式の行われる家に行くとのことでした。わたくしが彼にわたしの吹き消された燈をともしてくれるように頼むと、彼は、いまその時間がないからもっと先へ行きなさい、そうすれば別の燈が見つかるでしょうから、と言い残して、そのまま行ってしまいました。やむなくわたしが更に進むと、そこには一つの寄りかかりイスがあつて、その上に燃えさかっている燈がおいてありました。わたしは、その火で自分の燈ともし、それを手に先へどんどん進むと、こんどはある焼け跡へ着きました。そこは以前は人家があつたのですが、今はただガラクタだけになっていました。わたしは、ガラクタの山に座つてあたりを見渡しました。するとガラクタのなかから、先ず緑のチーズと白いチーズを探し出すことができました。そのチーズを食べると、つぎには大きな硬貨の入っている財布を発見しました。その財布が、ガラ

クタに挟まってとれないので、わたしは財布の中から、一握りの Christinchen といくつかの大きな硬貨を取り出しました。そこで白々と夜が明けて、結婚式のお客たちが帰路についたところでした。わたしが彼らを手招きすると、数人のお客はこちらにやってきましたが、その他の人々は広い道をそのまま先に進んでいってしまいました。わたしは、その後大変狭い道にさしかかりました。なんだか次第に恐ろしくなって、わたしは眼が覚めたのであります。』」わたしは、母親と妹にわたしの見た夢について語り、そこでわたし共はみんな床にひざまずいて共に神に祈ったのです。」彼の夢の話は以上の通りである。しかし、ペーター・ギュンター自身はこの夢に関して何の解釈も与えてないし、筆者には、ペーター・ギュンターがこの夢をもって、結婚披露宴の大群衆から彼を遠ざけることになった、孤独で奇妙な道だけを意味するものと解したか、あるいは、この夢をもってキリストの神聖を否認する神の証と考えたか、判断がつかない。ペーター・ギュンターの夢のなかにはキリストはまったく現れなかったが、もし現れたにしても、彼に燈ともしてくれることを躊躇したあの少年の像としてのみ現れたのであるから、後者の解釈も成り立つわけである。したがって裁判官たちが、なかでもオットー・ヨハネス・エラスミ（Otto Johannes Erasmi）が彼の書記に命じて、調書のなかにつぎのように書きとらせたのも不思議はない。すなわち「本官には捕囚のこの物語が、空想的な模倣から生じたものなのか、それとも墮落した虚言から生じたものなのか、見抜くことはできない。しかし、前後の関係や捕囚の行動から考えて、後者の解釈が当たっていると信ずべき理由がかなり大きいように思われる」と。事実、この後で判明したことであるが、ペーター・ギュンターは数年前ケーニヒスベルクにおいて、精神錯乱であるとの理由で医師達の手にかかり、前頭部の大動脈、いわゆる arteria temporalis から血液をぬいたことがわかった。

ペーター・ギュンターについての書類上における性格像は以上でかなりはっきりしたので、つぎに訴訟の相手方の様子に関して述べたいと思う。われわれのみるところによると、宗教上の問題が職人徒弟の会合で

話題になるなどというのは、当時も今も珍しいこととしなければならない。賑やかな会合に、どうしてこの宗教上の問題が話題になったかを考えてみると、最もありそうなのは、どうも次のようなことであるらしい。つまり、ペーター・ギュンターは彼の親方の証言が示している通り、静かな人がらで自分の信仰を理由もないのに人に語りかけるような男ではない。きっと他の徒弟仲間がそうするように仕向けたのであろう。ペーター・ギュンターがキリストについて、彼独自の信念をもっていることは街中に知れ渡っていた。人々の話によると、ペーター・ギュンターは、リューベックにやってくるずっと以前から、リューベックに住む信仰深い人々の間では悪評が高かったのである。それというのも、ヴィスマールの牧師団が、畏敬するリューベックの牧師団にあてた一通の挨拶状のなかで、彼は人々からキリストとキリスト教徒の敵だ、という噂をたてられており、それが理由でヴィスマールから追い払われたことを知らせてきたからである。ペーター・ギュンターは、また先ずヨハネス・ライヘ牧師に、つぎのこの悲しむべき事件の二週間前に、鍛冶屋番所において、長老たちから信仰についての審問を受けたが、彼らが、ペーター・ギュンターの口から聞きだせたのは、「自分をほっておいてほしい。この土地で心に平安を見出せなかったなら、わたしはトルコへでも行こうと思う」という言葉だけであった。筆者には、徒弟たち、とくにあのヘルマン・ドールマン（彼はペーター・ギュンターよりも10才も年下でいたずら好きの元気な若者であった）が、あれこれとペーター・ギュンターに話しかけて、彼の信仰について吐露させるように誘ったものと思われる。よくあることだが、世間というものは、物静かで風変わりな人間を立腹させ、たちの悪い喜びを味わい、物事をまじめに受けとることのない人間たちは、まじめな人間が本気になって怒るのを面白がるものであるのだから。彼らもまたあらかじめペーター・ギュンターを怒らせるように話をもちかければ、立腹して殴り合いになるぐらいのことは承知の上であったかも知れない。なぜならば、人々は一人の人間の意見と行動が、他人のそれと違うことを我慢しようとはしないのである。しかし、

彼らがこぞってこんな風にペーター・ギュンターを揶揄する仕方は、結局のところ、運命がわれわれをからかうのとまったく同じである。運命は先ずわれわれを有罪にしておいてから、しかる後にわれわれを罰するものである。この意味において、筆者には本当のキリスト教徒的信心は、神の冒涇者たるペーター・ギュンターの側にあり、信仰についての無関心さは他の徒弟の側にあったものと思われてならない。裁判官たちが徒弟の一人に対して「ペーター・ギュンターの神への冒涇の原因についてどう思うか」と尋ねた際、その徒弟の答えは、「他人から聞いたところによると、それは言ってみれば口論の半ばでほとぼり出たものだそうです」というものだった。思想のない者は幸せである。ヘルマン・ドールマンとその友人マルクス・ゲートエンスおよびヒンリッヒ・ケネヴィフは、彼らの惹き起こした災いの余りにも大きなのを見て、良心に咎められたのかも知れない。少なくとも彼ら三人は、未だペーター・ギュンターに対する審問が終わらないうちにハンブルクに向けて旅たってしまった。

以上のように考えてくると、今や恐らくペーター・ギュンターとその相手とどちらの主張が真実であるかを計ることができる時点に達したとしてよいであろう。ペーター・ギュンターは、証人たちが彼の罪として主張したところをすべて認めたにもかかわらず、彼がわれわれの救世主たるキリストに罵言を浴びせたという件だけは、最初から否認し通してあった。ペーター・ギュンターの述べるところによると、彼は「ジェスイット Jesuit が最初に呪われた悪党からかかる偶像を造り上げた」と言ったのではなくて、「呪われた悪党であるジェスイットがはじめてイエス・キリストをかかる偶像に造り上げた」《Die Jesuiten, die verfluchten Schelme, haben erstlich Jesum zu solchem Abgott gemacht.》と言ったのだという。そしてペーター・ギュンターは単純にも、ジェスイットはイエス・キリストの名を称することによって神の名誉を傷つけた、と考えたのであった。はたして彼の言うことが正しかったのであろうか。筆者はペーター・ギュンターを信すべきだと思う。ペーター・ギュンター

の神はただ一つである、という信仰は、ただ単に、彼の内心的な悟りによるものではなく、当時彼の故郷である東プロイセンで流行した“Socinianer”と称する宗派の影響もあったと考えられる。もしそうだとすると、彼がジェスイットを悪く言うには理由がある。ジェスイットはポーランドで“Socinianer”たちにひどい仕打ちをしたのであった。さらに、ペーター・ギュンターの進行については、彼に彼が救世主の神聖を否認したにせよ、キリストに罵言を加える理由はない。そしてヘルマン・ドーマン、マルクス・ゲートエンスおよびヒンリッヒ・ケネヴィフらが一緒になって述べたその反対の経緯を推察してみるならば、まさにつぎの通りであったろう。すなわち、われわれは、灯とは容易に、とくに酔った上では、自分が期待している言葉を現実聞いたように思い込むものである。ヘルマン・ドールマンも多分に冒流の言葉を期待しており、それを聞いたら即座に殴りかかろうとしていたのではないかと考えられるもする。また人は他人から伝え聞いたことを、直接自分の耳で聞いたかのように思い込む傾向が強いものである。そうであってみると、マルクス・ゲートエンスおよびヒンリッヒ・ケネヴィフは、ヘルマン・ドールマンから平常ペーター・ギュンターが神を冒流する、と幾度も聞かされていたので、今度も自分から直接にそれを聞いたかのように思い込んでしまったのではないかと疑う。そしてさらに、ペーター・ギュンターのすぐそばに座っていた区裁判所の走使いと親方の息子ミッシェル・ハーベは、ペーター・ギュンターが口にしたといわれている冒流の言葉を何一つ思い出せないのであった。

しかし、ペーター・ギュンターを審問した法律家たちおよび教理問答をした神学者たちは、叙上の考え方は詭弁であるとみなした。彼らの心理学は「二人の証人の言葉をもってすれば、真実がはっきりする」という韻文に要約されるものであって、ペーター・ギュンターの場合、彼が神を冒流したことについての証人は三人もいたのであった。ペーター・ギュンターのために任命された弁護士アオグスト・ゴットフィード・ユスチン・ホフマンは大いに努力して証人および供述書に対する忌避理由

を整え、証人たちは証言能力に欠ける証人であり、その主張には信頼性がなく、かりに信頼したとしても、被告には放免さるべき法律上の理由、たとえば、精神病、酩酊、その他激情、過失、初犯、反省等々があることを、クラルス、ファリナキュウス、カルプゾフ等およびその他の学者たちの説から多く引用して述べ、さらに弁護士は、被告ペーター・ギュンターには神を冒瀆する前提が欠けている、と弁護したのであった。すなわち、彼ペーター・ギュンターはキリストの神聖を認めないのであるから、そもそも神の冒瀆者ではあり得ない、と言うのであった。しかし、弁護士のこれらの努力はすべて無駄であった。ただその長ったらしい法律上の演繹法と三百代言的言辞の間にまじって、若干の率直な文章のなかに、信教の自由という思想への加担がその姿を見せている。つぎの文章がそれである。「かかる間違った信念は、いかなる体刑または法的強制によっても矯正されない。……なぜなら殊にこの誤れる良心がいくらかでも強制力をもっており、被告とわかち難く結びついているのであるから、この男は自らの良心を犯さなければ三位一体を信ずることも受け入れることもできないのである。」しかし、かかる智慧は弁護士ホフマンの自分のものではなく、恐らくは先に述べたヨハン・ウイルヘルム・ペーターゼン博士によって入れ智慧されたものであろう。ペーターゼン博士はペーター・ギュンターのために三通の手紙をリュエベックへ送った。一通は1人の牧師へ、他の一通は彼の父であるゲオルク・ペーターゼンである。ゲオルク・ペーターゼンは Cancellisten でかつて公証人であった。そして最後の一通は、法律顧問ヨハン・ポムメルシュ博士へあてたものである。これらの手紙には後世の宗教関係文書の精神が力強くかつ美しく現れており、もしこれらがゴットフリード・アーノルド著『教会と異端者の歴史』（第二巻）《Gottfrieds Arnolds Kirchen-und Ketzerhistorie, im zweiten Bande.》に収録されていなければ、ここに再録したいほどである。

しかし、残念なことにこれらの手紙は遅すぎた。というのも、ウィッテンベルクの神学科の教授団たちは、頑固に既往の立場を守ったのであ

る。神学科の教授団はかつての同僚マルチン・ルター（D. Martini Luthers）の思想を尊重するためには、確固たる正統信仰の範をすべての人々に先立って示すべきである、と考えており、まさにそのような立場にあるこの神学科の教授団に対し、市参事会の決定にもとづき、第一級公証人たるアドルフ・マートハウス・ロードがペーター・ギュンター審問に関する一切の書類を送付して意見を求めることになったのであった。神学科教授団は、慎重に審議したすえ、1687年8月3日、つぎのようにその意見を発表した。まずペーター・ギュンターは、第一に悪意ある背教者であり、彼はその懺悔牧師およびその他の学識深い良心的な牧師に相談したり、また信心深いキリストを信ずる人々と話し合うことをしないで、サタンから空想的かつ狂信的な思想を受け入れたものである。つぎに彼はまぎれもない無神論者である。なぜならば三位一体の神以外のものを信ずる者は、実のところトルコ人、ユダヤ人および盲目の異教徒の偶像同様、邪神と偶像との間に迷っている者である。それはサタン自身ではないにせよ、われわれの盲目の理性を迷わすサタンのまぼろしの偶像である。第三に、ペーター・ギュンターは神聖の冒読者であり、明らかにけがらわしい神の冒読者である。彼はキリスト教的生活を送っていたといわれるが、キリストを否認する者がどうしてキリスト教的生活ができれば？ 彼は聖歌を唱い、聖書、福音書を読んだそうだが、彼はキリストを信じないでこれらの行為をしたのであるから、これはなんと卑しむべき濫用といわなければならない。本件に関し、僧侶たちは第一に哀れな迷妄の魂が回復可能かどうか見極めることに努めなければならない。しかしこうした努力が無駄である場合には、大いなる神にしてみればわれらの救世主たるイエス・キリストの栄光に対する義務とて、それにふさわしい配慮をほどこし、他の神の冒読者どもを震え上らせ、キリスト教徒仲間と信心深い街の人々の怒りを和らげ、神の怒りが街と市民とに回復し難い損害を与えることのないような見せしめのための刑罰を被告に与えるべきである、と。

リューベックの市参事会は、キリスト教の聖職者の良心に向けての要

請を蔑ろにせず、ウィッテンベルクの信心深い人々の指示に従うことにした。しかし、長老、教導師およびすべての牧師たちが、1687年10月20日に市参事会に報告せねばならなかったことは、あまり満足すべきものではなかった。すなわち「彼のそばにいた人々は、ペーター・ギュンターが頑固にも自説をまげず、他人の説を受け入れようとはせず、あいかわらず間違った自説を固執するのをみて、誠にいたましい思いをした。彼はキリスト教徒として聖晩餐を喜んで受け大きな慰めを得たが、いまやそのようなものは欲しがっていない。彼は神の啓示された善よりもさらに至高のものを知っており、これを守り、いかなる人およびサタンの手によってさえもそれから別離されることなく、もしそのことにより死刑になるのであるのなら喜んで死ぬ、といった。彼は神を冒瀆した、という批判についてはこれを激しく否認したが、いっそうのこと早く死刑にして監獄から出られるようにしてほしい、と述べ、さらに、人々が彼に教会の公開の集会で、みんなが説教壇で彼のために祈った、と語ると、ペーター・ギュンターは、そんなことはして貰いたくないし、また何の役にも立たない、と答え、そしてまた別の話の際には、彼が暗い牢獄に座っていると、夜毎に一つの燈が現れて彼を照らして慰める」というのであった。ペーター・ギュンターはやがて監獄から出る日がきた。神学科教授団の意見書に少々おくれてウィッテンベルク法学科教授団から判決草案が到着したが、それは何時でも宣告できるように整えられており、その結びの部分は、つぎの通りであった。「三人の証人が先に述べた彼の冒瀆の言葉をはっきり聞いた旨を口頭で宣誓しており、訊問においてもついにその主張を変えず、はっきりと彼の罪状を認めさせた。過度に酩酊していたという証拠はなく、さらに彼の発言からすれば、その瞬間に理性が狂っていたとは認められない。以上の事実から判断すると、ペーター・ギュンターを、神を冒瀆する言葉を吐き散らしたかどで、断頭の刑に処すべきであると思料する。」

エー・ホーホヴェ・ラーテ等教授団の一部の人々は、とくにショーメルス博士が処刑に反対であったにもかかわらず、右の判決にさらに付加

して、ペーター・ギュンターの死体は改心の形跡がない限り、特殊な場所に埋葬すべきであるとの意見を付加すべきことを主張してゆずらなかった。ちなみに、「リューベックの人々は人を許すことを知らない」という諺がある。

かくして 1687 年 10 月 25 日、愚者で英雄であるペーター・ギュンターは従容として死に就いた。彼の最後の言葉は「永遠の真実の光よ、われを憐れみたまえ」であった。僧侶たちがペーター・ギュンターにキリストと共に磔刑になった盗賊のように、この際にキリストの恵みにすがるように、とすすめると、ペーター・ギュンターは、ただ首を振って断った。こうして首を振ったことによって、——信仰深き者たちのうちの 1 人の報告によれば——疑うすべもなく神の裁きは下り、首切り役人のなれた手は、いつもならそのようなことはないのに妨げられて、首を一度で切り落とすことができなかった。しかし、二度目にはこの神の冒涜者といわれた者の首は地上にころがった。思うに、ペーター・ギュンターを死へ誘ったこの刃には、首切り役人の唱え文句が刻まれていたのであろう。

わたしが刃を振り上げるとき

神よ、

罪人に永遠の命を与えたまえ